

神の子と樹木

牧師 山本 護

「わたしは一本の樹木を見つめる。わたしはこの樹木を絵として受け取ることができる。光をはねかえす固い幹、和やかな青といぶし銀の天空を背景にふき出した若葉など(『我と汝』M.ブーバー1878～1965)」。哲学者ブーバーは続けて「樹木を運動として～」、「樹木を構造や生活様式の実例として～」、「樹木を純粋な数式関係として～」と語る。そしてこう結論づけます。「しかし、もしみずからの意思と他からの恵みによって、この樹木を見つめているとき、わたしが、樹木との関係の中にひき入れられるということも起こり得る」。

この引用では、なんのこっちゃと、ケムにまかれた気がするかもしれません。でも「我と汝」の響きは一貫しています。知識や経験は「我とそれ(一方的な)」の関係に過ぎず、めざすべきは「我と汝(相互に)」の結びつきなのだと。それが「わたしと樹木」の関係にも成り立つという思想。人間同士も、人間とモノも「我と汝」に再創造されうる。

生意気で破滅的な若者らしい日々に、怪しげな喫茶店の片隅で「我と汝」を読んだ。あの時は軸である「恩寵」を捨象しており、「みずからの意思と他からの恵み」は今になって気づきました。20世紀前半のオーストリア・ドイツで、ユダヤ教に足場を置いたブーバーの思想には恩寵が不可欠です。神の恵みにも樹木にも無関心だったあの頃、また数百年にわたってユダヤ人を迫害し続けた欧州の屈折も知らないまま、何かに心動かされました。



「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けた。この霊によってわたしたちは〔アッバ、父よ〕と呼ぶ。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒に証ししてくださる(マ 8:15～16)」。

「神の子とする(聖)霊」とは「他からの恵み」、そして「わたしたちの霊」とは「みずからの意思」に当たるでしょうか。知識や経験に規定されない私たちの自由な霊が、聖霊と一緒に神を「アッバ、父よ」と呼びます。そう呼ぶがゆえに私たちは「神の子」とされる。神の子である自覚はなくとも、教会庭の樹木や木陰が、美しさでも有用性でもなく、ことのほか親しく感じられます。これは神の子である予感でしょうか。

神の子イエスの感覚に近づく、と言うとおこがましい。でも、聖霊が私の霊と響き合っているのだから(8:16)、あながち間違ってもいいか、と思いました。Ω